

【旧約聖書日課】サムエル記下 12章1～13節

1主はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンは来て、次のように語った。

「二人の男がある町にいた。

一人は豊かで、一人は貧しかった。

2 豊かな男は非常に多くの羊や牛を持っていた。

3 貧しい男は自分で買った一匹の雌の小羊のほかに

何一つ持っていなかった。

彼はその小羊を養い

小羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて

彼の皿から食べ、彼の椀から飲み

彼のふとところで眠り、彼にとっては娘のようだった。

4 ある日、豊かな男に一人の客があった。

彼は訪れて来た旅人をもてなすのに

自分の羊や牛を惜しみ

貧しい男の小羊を取り上げて

自分の客に振る舞った。」

5ダビデはその男に激怒し、ナタンに言った。「主は生きておられる。そんな

ことをした男は死罪だ。6小羊の償いに四倍の価を払うべきだ。そんな無慈悲な

ことをしたのだから。」7ナタンはダビデに向かって言った。「その男はあなた

だ。イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたに油を注いでイスラエルの王

としたのはわたしである。わたしがあなたをサウルの手から救い出し、8あなた

の主君であった者の家をあなたに与え、その妻たちをあなたのふとところに置き、

イスラエルとユダの家をあなたに与えたのだ。不足なら、何であれ加えたであろ

う。9なぜ主の言葉を侮り、わたしの意に背くことをしたのか。あなたはヘト人

ウリヤを剣にかけ、その妻を奪って自分の妻とした。ウリヤをアンモン人の剣で

殺したのはあなただ。10それゆえ、剣はどこしえにあなたの家から去らないであ

らう。あなたがわたしを侮り、ヘト人ウリヤの妻を奪って自分の妻としたから

だ。』11主はこう言われる。『見よ、わたしはあなたの家の者の中からあなたに

対して悪を働く者を起こそう。あなたの目の前で妻たちを取り上げ、あなたの隣

人に与える。彼はこの太陽の下であなたの妻たちと床を共にするであろう。12あ

なたは隠れて行ったが、わたしはこれを全イスラエルの前で、太陽の下で行う。』

13ダビデはナタンに言った。「わたしは主に罪を犯した。」ナタンはダビデに

言った。「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。」

【福音書日課】マルコによる福音書 4章10～12節、21～34節

10イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たち

とがたとえについて尋ねた。11そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神

の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。

12それは、

『彼らが見るには見るが、認めず、

聞くには聞くが、理解できず、

こうして、立ち帰って赦されることがない』

よくなるためである。」

<sup>21</sup>また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。<sup>22</sup>隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。<sup>23</sup>聞く耳のある者は聞きなさい。」

<sup>24</sup>また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。<sup>25</sup>持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

<sup>26</sup>また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、<sup>27</sup>夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。<sup>28</sup>土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。<sup>29</sup>実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の 때가来たからである。」

<sup>30</sup>更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。<sup>31</sup>それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、<sup>32</sup>蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

<sup>33</sup>イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。<sup>34</sup>たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

## 《神の国》のミステリー【こども説教のために】

主イエスが現代の世界にいらしたら、どのような本を読まれたり、テレビをご覧になられたりするのだろうか、と想像したことがありますか。『聖書』しか読まない、ニュースしかご覧にならない、ということは決してなかったと思います。それどころか、いろいろなジャンルの本を読まれ、ときにはテレビドラマもご覧になられたのではないのでしょうか。特に好まれたのは、「ミステリーもの」だったかもしれません。「謎解き」の物語です。

主イエスは、弟子たちや従ってくる人々に、「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられている」とおっしゃいました。「神の国の秘密」をご存じでいらして、それをお教えくださっている、ということです。それはどんな「秘密」なのでしょう。なぜ、主イエスは「秘密」をご存じなのでしょう。

「秘密」と訳されている語は、ギリシア語で「ミュステリオン」です。「ミステリー」の語源です。おそらく、主イエスは、「神の国の秘密」を生まれながらに知っていたのではないのでしょうか。けれども、その「秘密」を知りたいと、「謎解き」に挑まれたのではないのでしょうか。12歳の少年イエスの出来事は、『聖書』の「謎解き」に夢中になった少年の逸話でした。そこに、誰もが見落としていた秘密、「神の国の秘密」を見つけ出されたのです。主イエスは、その秘密を、わたしたちに解き明かしてくださったのです。

## 「何を聞いているのか」

弟子たちに「神の国の秘密」を解き明かしてくださった主イエスは、一方で、他の人々には、聞く力に応じて、多くのたとえでお語りくださったのです。「たとえ」は、確かに、難しい事柄を、そのままに説明したのでは理解しがたいときに、別の事柄に置き換えて語り、理解を促す方法です。

30年前、理系の大学院に進学し、専門的な研究をする世界に足を踏み入れたとき、先輩の研究者から繰り返し言われたことがありました、「自分の専門領域の話を、専門外の人、特に理系の素養がない一般の人にも理解してもらえるように語れるようになりなさい」と。「それができなければ、本当に分かっているとは言えない」とも言われたのです。そこで、機会があれば周囲の友人や知人に自分が学んでいることを話すように心がけましたが、そのたびに、自分がいかに分かっていないかということ突き付けられ、「もっと知りたい。もっと深く、広く理解したい」と思わずにいらなくなりました。実のところ、その関心の拡がりや、いつの間にかわたしを『聖書』の世界、神学の世界に向かわせたところがあったのかもしれない。

主イエスの時代、『聖書』の専門家たちがいました。「律法学者」と呼ばれる人たちです。彼らは、『聖書』について人が質問すれば、教科書的に答えを与えてくれたはずですが、けれども、主イエスは、そのような専門家の与えてくれる解答に満足されなかったのでしょうか。ご自身で『聖書』の御言葉に深く立ち入られ、専門家が見落としていたような小さな事柄や、逆に大きな事柄に、「神の国の秘密」を見出されたのでしょうか。主イエスは、それらの事柄を知られたからには、ひとり黙って満足しているわけにはいかなかったはずですが、どうにかして、多くの人に伝え、理解してもらいたい、と思われたのではないのでしょうか。

わたしが大学院で取り組んでいたのは、当時は「行動生態学」と呼ばれていた分野でした。生物の振る舞いや相互の関係性などを、野外や実験室での観察、また遺伝分析など、多様な方法を用いて分析するのですが、難しいのは、そのデータをどう解釈して説明するか、というところです。専門用語を駆使しながら支離滅裂な説明を続ける学生には、いつも、先輩研究者や教授の助けが必要でした。

主イエスは、わたしたちが『聖書』を理解する上で、どこをどのように読み、解釈して自分自身の言葉にしたらよいのか、道筋を与えてくださるのです。「たとえ」を用いられたのも、わたしたちの理解が促されるためでした。主イエスの教えという「眼鏡」に頼るとき、わたしたちは、確かに、『聖書』の中に描かれる「神の国」のあり様を知るようにされているのではないのでしょうか。

## 収穫の時が来る

「隠れているものは、あらわになる」、「秘められたものは、公になる」と、主イエスは言われます。「聞く耳のある者は聞きなさい」、「何を聞いているかに注意しなさい」と、主イエスは重ねられます。

主イエスは、わたしたちに、ただ『聖書』の知識や、ユダヤ・キリスト教的な知恵を授けたかったわけではないのです。そこにある「神の国の秘密」を知るようになることをこそ、願ってくださっていたのでしょう。何でも専門家の言うことだからと鵜呑みにするような『聖書』の学び方は、主イエスの導いてくださる方法ではありません。

いいえ、実のところ、主イエスが学ばれたのは、『聖書』という本に留まるものではなかったと言ってもよいのです。何となれば、主イエスがお示しくださったのは、「神の国」なのです。『聖書』という本、あるいは、その知識を収めるわたしたちの頭脳、などに収まるような小さなものではありません。この「世界」のあり様、それこそが、主イエスがお教えくださった「神の国」のほうです。

土に蒔かれた種は、芽を出して成長する。茎、穂を出させ、豊かな実りを結ばせる。その実りが熟す時が来る。

小さなからし種が、土に蒔かれると、どんな野菜よりも大きな木に成長し、葉陰に鳥が巣を作れるほど大きな枝を張るようになる。

これは、主イエスが精いっぱいのお語りくださった、「神の国」の広がり、その大きさのことなのでしょう。わたしたちの中で、「神の国」は、いつのまにか大きく育ち実を結ぶようになる。わたしたちの世界で、「神の国」は、どんな他の価値観よりも大きな広がりをもったものとして、すべてのものを覆い包む。そう、主イエスは、たとえでお教えくださっているのです。

ただ、主イエスは、たとえでお教えくださって終わりにはなさいませんでした。弟子たちを従わせられました。「わたしについて来なさい」と招かれました。ご自身の教えだけでなく、日々の振る舞い、人生の生き方、そのすべてを、お示しになろうとされたのです。たとえだけでは、「神の国の秘密」は語り尽くせないからです。示し尽くせないからです。わたしたちが知るべき「神の国」の最良のたとえは、主イエスその方に他ならないのです。

「神の国は近づいた」と告げて、主イエスは宣教を始められました。主イエスが近づいてくださるところで、わたしたちは、すでに「神の国の秘密」に触れさせていただいているのです。わたしたちが、「神の国」に生きる者として、語り、振る舞い、生き方を定めるようにと。わたしたちが、主イエスと共に、すべての人びとのための「神の国」のたとえとして生きる「神の子」であることができるようにと、主イエスが招いてくださっています。